

平成 29 年度ユネスコスクール年次報告書

1. 学校概要

学校名 愛知教育大学附属岡崎中学校
種 別 保育園・幼稚園 小学校 小中一貫^{※注1}
 中学校 中高一貫^{※注2} 高等学校
 教員養成大学 専修学校、各種学校
 特別支援学校
 その他（例：小中高一貫）

所在地 〒444-0864
愛知県岡崎市明大寺町栗林 1
E-mail ys-yama@aecc.aichi-edu.ac.jp
Website <http://www.oj.aichi-edu.ac.jp/>
幼児児童生徒数 男子 257 名 女子 222 名 合計 479 名
幼児・児童・生徒の年齢 12 歳～15 歳

2. 報告期間

平成 29 年 4 月～平成 30 年 3 月

3. 活動内容

(1) 活動の概要

本校では、ESDを「持続可能な社会の実現のための教育」と捉え、ESDの実践を通して、「問題を見いだす力」「問題の解決に向けて、自らの意志に基づいて行動する力」「自分の意見に偏らず、仲間と議論する力」「広い視野でよりよい方法を模索する力」の4つの力を育むことを目標とした。私たちは、これらの力を育むことだけでなく、「よりよい社会を自分たちの手で実現したい」という夢を子どもに抱かせることで、「持続可能な社会」を現実のものとしていくと考える。そのためには、生活教育を基盤とした問題解決的学習過程による授業により、子どもの問題解決力を高めることが重要である。

本校では、すべての教科において、生活教育を基盤とした問題解決的学習過程をカリキュラムに組み込み、日々の教育活動を行っている。

本年度の実践として、①セイウタンポポから迫る環境学習（1年）、②知的障がい者陸上競技応援ハリセン制作から迫る福祉教育（2年）、③農業従事者の減少から迫る持続可能な生産と消費についての学習（3年）、④セクシャルマイノリティから迫るジェンダー教育（3年）の4点を紹介する。

① セイウタンポポから迫る環境学習（1年）

附属中学校の池にいる、「メダカ」だと思っていた魚が、すべて「カダヤシ」という外来種だと知り、もしかして身近にあるタンポポも、外来種ばかりなのではないかと不安になり、調査を始めた。学校に咲くタンポポは、7：3の割合で予想通りセイウタンポポが多かったのだが、近所の岡崎

公園は日本のタンポポばかりだったと主張する子どもが現れた。土日も使った数多くの調査から、国立研究所や農業大学、奥殿陣屋など古くからある土地には日本のタンポポが群生しており、市街地の公園やアスファルトの道沿いなど、比較的新しい土地にはセイヨウタンポポが多いとわかった。この結果から、日本のタンポポとセイヨウタンポポは好む土が違っており、古くからある自然の多い環境を守り、増やしていくことが日本タンポポとセイヨウタンポポが共存できる方法ではないかと考えるようになった。

② 知的障がい者陸上競技応援ハリセン制作から迫る福祉教育（2年）

日本知的障がい者陸上競技連盟の方から、日本ID陸上競技選手権大会で、実際に使用される応援グッズ（ハリセン）のデザインを依頼された。昨年度、大阪で開催された大会にボランティアスタッフとして参加した子どもは、まだまだ認知度が低い実態を語る。そのような実態の中で、がんばっている選手を応援したいという思いを抱いた。その中で、「東京パラリンピックで、知的障がい者陸上を盛り上げる応援ハリセンをデザインしたい」という目標が生まれた。選手の走っている様子をもとに、配色を工夫しながらデザインを完成させた。そして、実際に選手権大会へサポーターとして参加し、思いをデザインに反映させることよさを実感した。



選手権での応援

③ 農業従事者の減少から迫る持続可能な生産と消費についての学習（3年）

衰退の一途を辿る日本の農業であるが、農業で着実に生計を立てている農家がいる。例えば、愛知県岡崎市で観光農園を営むK氏。45歳で新規就農し、無人栽培やネット集客の仕組みを構築し、年収は企業勤務時代を大きく超える。「旧態依然の産業である農業は、参入の大きなチャンス」とK氏は言う。子どもは、農家や専門家からの取材をとおして、「日本らしい強い農業の姿」を追究した。そして、「高品質」「安心・安全な農業」「IT化を図ったスマート農業」などを挙げ、農家が独自性を発揮できる農業をイメージした。さらには、それぞれの農家が横のつながりを強め、地域色を出したり、ブランド化したりして、全体として強くなるべきだと提案した。

④ セクシャルマイノリティから迫るジェンダー教育（3年）

くらしの中に根づく男らしさや女らしさに目を向けると、何気ない場面、必要でない場面でも性別にとらわれていることに気づいた。そんな中で生きづらさを感じている、セクシャルマイノリティの人々のくらしに焦点をあて、当事者やその家族、関連団体の人々との交流を行った。多くの人の生き方にふれることで、性のあり方はグラデーションであり、一人一人が違うのは自然なことであるということを実感した。そして、全ての人々が性にとられず、自己実現を叶えることのできるくらしの仕組みを構築していくべきだという考えをもった。そのために、お互いの違いを認め合い、共に生きることのできる人と人とのつながりをつくりたいという思いをもった。



関連団体と交流

(2) 活動の詳細

① 活動内容

ア. 活動分野 (複数選択可)

<input checked="" type="checkbox"/> 1. 環境	<input checked="" type="checkbox"/> 2. エネルギー	<input checked="" type="checkbox"/> 3. 防災	<input checked="" type="checkbox"/> 4. 生物多様性
<input type="checkbox"/> 5. 気候変動	<input checked="" type="checkbox"/> 6. 国際理解、文化多様性	<input checked="" type="checkbox"/> 7. 地域の伝統文化、文化遺産	<input checked="" type="checkbox"/> 8. 人権・平和
<input checked="" type="checkbox"/> 9. 健康・福祉	<input checked="" type="checkbox"/> 10. 食育	<input checked="" type="checkbox"/> 11. 持続可能な生産と消費	<input checked="" type="checkbox"/> 12. 貧困
<input type="checkbox"/> 13. エコパーク	<input type="checkbox"/> 14. ジオパーク	<input checked="" type="checkbox"/> 15. グローバルシチズンシップ教育 (GCED)	
<input checked="" type="checkbox"/> 16. ジェンダー平等	<input type="checkbox"/> 17. その他()		

イ. 活動を通して育みたい資質や能力 (複数選択可)

<input checked="" type="checkbox"/> 1. 批判的に考える力	<input checked="" type="checkbox"/> 2. 未来像を予測して計画を立てる力
<input checked="" type="checkbox"/> 3. 多面的、総合的に考える力	<input checked="" type="checkbox"/> 4. コミュニケーションを行う力
<input checked="" type="checkbox"/> 5. 他者と協力する態度	<input checked="" type="checkbox"/> 6. つながりを尊重する態度
<input checked="" type="checkbox"/> 7. 進んで参加する態度	
<input type="checkbox"/> 8. その他(自由記入)	

ウ. 活動時間 (複数選択可)

<input checked="" type="checkbox"/> 1. 教科の時間	<input checked="" type="checkbox"/> 2. 総合的な学習の時間
<input type="checkbox"/> 3. 特別活動等	<input type="checkbox"/> 4. クラブ活動
<input type="checkbox"/> 5. その他(自由記述)	

エ. 使用した教材 (書籍、ウェブサイト、パンフレットなど具体名)

<p>① セイヨウタンポポから迫る環境学習 (1年) 安谷彰彦 (2015) 『わたしのタンポポ研究』 さ・え・ら書房 小川潔 (2001) 『日本のタンポポとセイヨウタンポポ』 どうぶつ社</p> <p>② 知的障がい者陸上競技応援ハリセン制作から迫る福祉教育 (2年) 伊達千代 (2014) 『配色デザイン見本帳』 エムディエヌコーポレーション 日本知的障がい者陸上競技連盟 http://www.jidaf.org/ パラ陸上競技 公式ガイド 2017 (日本パラ陸上競技連盟)</p> <p>③ 農業従事者の減少から迫る持続可能な生産と消費についての学習 (3年) 農林水産省「平成 29 年版 食料・農業・農村白書」平成 29 年 7 月 愛知県農林水産部農林基盤局林務課「農業の動き 2017」平成 29 年 5 月 農林水産省「農林業センサス」http://www.maff.go.jp/j/tokei/census/afc/ 農林水産省「食料・農業・農村基本計画の概要」平成 27 年 4 月</p> <p>④ セクシャルマイノリティから迫るジェンダー教育 (3年) LGBT 支援法律家ネットワーク出版プロジェクト (2016) 『セクシュアル・マイノリティ Q&A』 弘文堂 石川大我 (2011) 『「好き」のハテナがわかる本』 太郎次郎社エディタス</p>

- ② ユネスコスクールとしての活動を各校の教育課程（指導計画）にどのように位置付けているか。指導内容を適切に定め、指導方法の工夫改善に努めているか。

本校は、開校から今日に至るまで、生活教育を普遍の理念として掲げ、教育研究を行っている。子どもを取り巻く問題を解決し、よりよい社会を実現していくことのできる人間を育てることを目指している。

そのため、授業においては、子どもの生活に基盤をおき、子どもの生活から授業を構想する問題解決的学習過程を取り入れ、実践を行っている。持続可能な社会の実現のために、現在問題となっている社会事象等を教材として扱ったり、問題を解決するために必要な力を育むことをねらったりすることを、各教科で共通認識し、授業を構想している。

- ③ 学校全体で組織的かつ継続的に活動に取り組める体制や環境をつくるため、どのような取組を行っているか。

授業づくりにおいては、単元の構想段階から各教科や複数の教科が一緒になって話し合う時間を設定している。時には、全校で一つの授業について練り上げるようにしている。

- ④ ユネスコスクールとしての活動の質の向上のための学校活動の評価（内部/外部）の方法・具体的内容と、それによって明らかになった成果と課題。

12月に生徒と保護者、教職員を対象に学校評価のアンケートを実施している。その結果、生徒、保護者共に、授業への満足度は高く、問題解決的学習過程を継続することで、子どもの主体的な学びが展開されていることが明らかとなった。今後の課題については、意欲の面だけでなく、力の高まりについてどのように評価していくかが課題となっている。

- ⑤ ESD の推進拠点としての活動成果の発信方法・内容と、発信により得られた効果。

毎年10月に「生活教育研究協議会」を開催し、800名を超える参観者のもと、各教科の授業を公開している。また、本校の研究まとめの冊子に実践を掲載し、研究協議会に参加された先生方へ配付することで、実践を紹介するよう努めている。

- ⑥ 学校以外の団体との協働・交流・ネットワーク形成（地域コミュニティ、大学、ESD活動支援センター、ESDコンソーシアムとの連携など）

授業において、子どもの力だけでは解決が困難な問題に出会う場面は多い。そのような場合は、専門家に取材に行くことを奨励している。大学教授や企業、研究所など、それぞれの分野の専門家への取材を通して、子どもは、問題の解決に向かって学びを深めている。

- ⑦ 国内外のユネスコスクールとの交流・ネットワーク形成

国内外のユネスコスクールとの交流は現在行っていない。今後は、交流することにおける、子どものメリットを考え、方法を模索していきたい。

- ⑧ ユネスコス쿨の活動による効果について、特筆すべき（特に強調したい）内容（例えば児童生徒、教員、カリキュラム・教授法、学校経営、地域・保護者との関係など様々な面でのポジティブな変化）

先述した、学校評価アンケートにおいて、「学校の授業は分かりやすく楽しい」（生徒）の項目に対して、90%以上の生徒が楽しいと回答している。追究をもとにした授業を展開することで、子どもの主体的な姿を生み出すことができている。

（3）平成 30 年度の活動計画

平成 30 年度においても、問題会解決的学習過程を軸とした実践を展開していく。平成 30 年 10 月 2 日には、本校にて、生活教育研究協議会を開催し、9 教科の授業を公開する予定である。また、同時に実践紹介のまとめ冊子を配付し、広く実践を紹介していく予定である。